第３回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会

令和元年 10 月 21 日（月）
午前 10 時から 12 時まで
特別第一会議室（別館９階）

次　　第

１　開会
（１）知事挨拶

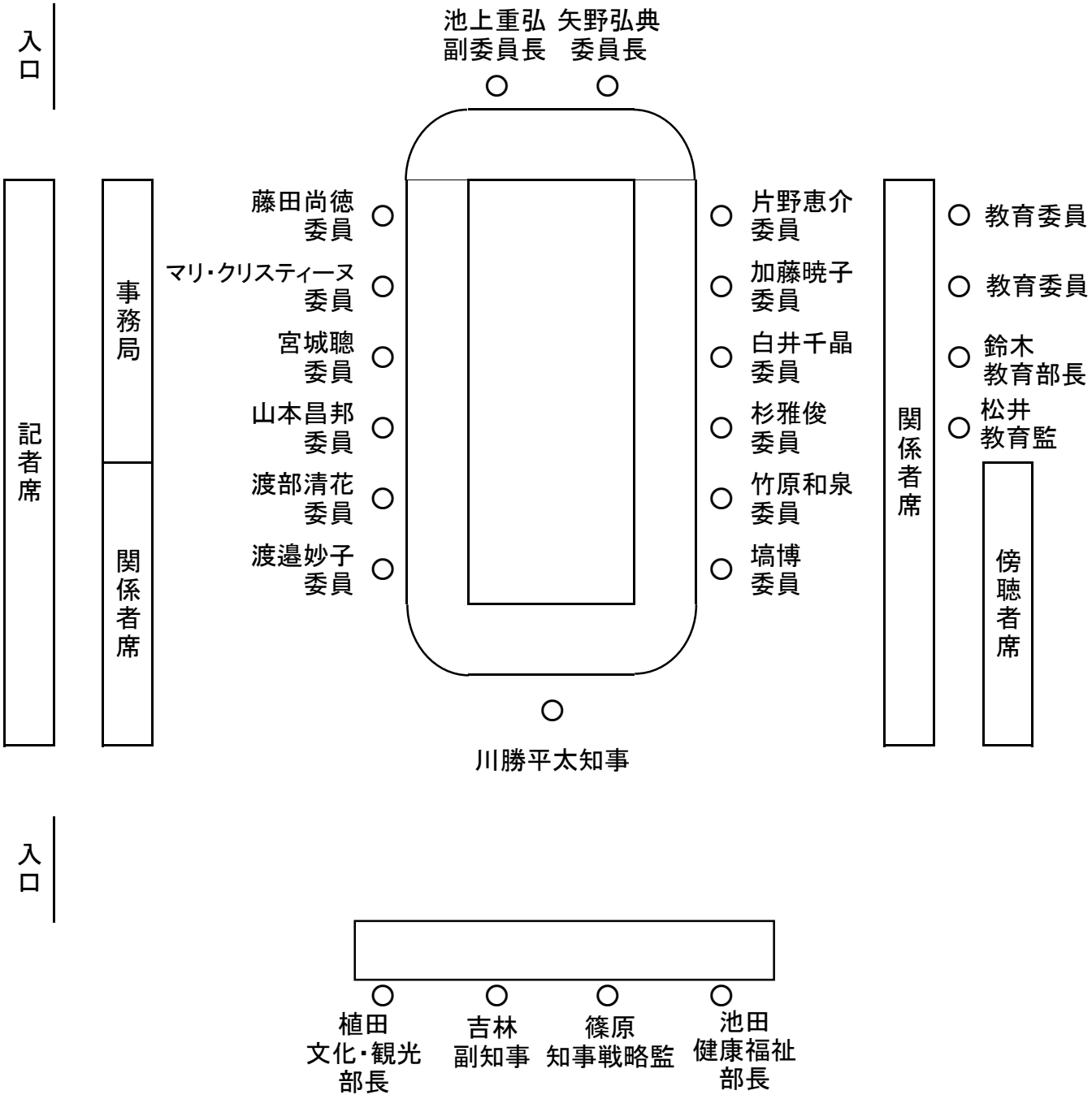
２　議事
（１）報告
　　第２回静岡県総合教育会議開催結果
（２）意見交換
　　一人一人のニーズに対応した教育の充実
（３）その他

３　閉会

＜配布資料＞
資料１　第２回静岡県総合教育会議開催結果
資料２　一人一人のニーズに対応した教育の充実に関する論点
別冊資料　・第３回実践委員会参考資料
　　・静岡県の特別支援教育
　　・静岡県における共生・共育
　　・企業で活躍する定住外国人ロールモデル 活躍事例集

第3回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会　座席表

日時　　令和元年10月21日（月）午前10時～
場所　　別館9階特別第一会議室



地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会委員一覧

（委員長、以下 50 音順、敬称略）

氏　名	役　職
矢野（やの）　弘典（ひろのり）（委員長）	（一社）ふじのくにづくり支援センター理事長
池上（いけがみ）　重弘（しげひろ）	静岡文化芸術大学副学長
片野（かたの）　恵介（けいすけ）	青年農業士
加藤（かとう）　暁子（あきこ）	日本の次世代リーダー養成塾専務理事、事務局長
清宮（きよみや）　克幸（かつゆき）	ヤマハ発動機ジュビロアドバイザー・(一社) アザレアスポーツクラブ代表理事
白井（しらい）　千晶（ちあき）	静岡大学人文社会科学部教授
杉（すぎ）　雅俊（まさとし）	静岡産業大学総合研究所参与
竹原（たけはら）　和泉（いずみ）	横浜市立東山田中学校ブロック学校運営協議会会長
豊田（とよだ）　由美（ゆみ）	ちゃの生（き）代表
仲道（なかみち）　郁代（いくよ）	ピアニスト、桐朋学園大学音楽学部教授
塙（ばん）　博（ひろし）	藤枝明誠中学校・高等学校校長
藤田（ふじた）　尚徳（ひさのり）	株式会社なすび専務取締役
マリ　クリスティーヌ	異文化コミュニケーター
宮城（みやぎ）　聰（さとし）	（公財）静岡県舞台芸術センター芸術総監督
藪田（やぶた）　晃彰（てるあき）	日光水産株式会社代表取締役社長
山本（やまもと）　昌邦（まさくに）	（一財）静岡県サッカー協会副会長
渡部（わたなべ）　清花（さやか）	東京大学大学院総合文化研究科修士課程
渡邉（わたなべ）　妙子（たえこ）	（公財）佐野美術館理事長

資料１

令和元年度　第２回静岡県総合教育会議　開催結果

１　**開催日時**　令和元年９月３日（火）午後２時から４時まで

２　**開催場所**　静岡県庁別館８階第１会議室Ａ、Ｂ、Ｃ

３　**出席者**

静岡県知事	川勝　平太
教育長	木苗　直秀
教育委員	渡邉　靖乃
	藤井　　明
	加藤　百合子
	小野澤　宏時
地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会	
委員長	矢野　弘典

４　**議事**

（１）第１回協議事項に関する実践委員会からの報告

（２）生涯にわたり学び続ける教育の充実

５　**出席者発言要旨（抜粋）**

出席者から以下のような意見及び提案が出された。

（１）第１回協議事項に関する実践委員会からの報告（伊東地区の新構想高校改編について）

・実践委員からは、分校の特殊性や個別の事情も配慮し、多様性を活かした柔軟な対応が必要であることから、当面存続させるべきとの意見が多数あったことを報告

＜総合教育会議での各委員からの意見＞

・新しい学校づくりでは安全性を最優先に考え、地元にとって将来どうあるべきか、長期的な視野に立って最善の選択肢を検討し、子供も教師も楽しく通うことができる学校を地域の人たちと共につくっていくことが大切である。

・伊東地区の特性を取り入れた教育内容では、既存のアートに加え、ジオパークに関連した観光学や地質学、医療分野などが考えられる。また、新たな特色付けとしてＩＴ技術を最大限駆使した先進的な学校体制を追及するチャンスがある。

・障害のある子とない子が共に学ぶことで、個性を認め合い、長所を引き出し合うなど、思わぬ相乗効果が生まれている。共に生きる社会をつくる観点からは、開校と同時期に共生・共育を始めることで、子供たちに良い変化を生み出せる。

・学校の統廃合の背景に人口減少があることを忘れてはいけない。小規模校のまま存続させれば教育の質を維持していくことが難しい状況を現場の教師や教育委員会がもっと訴えていかなければならない。

○全国的にみても静岡県は共生・共育を積極的に進めている。地形の特性から新校舎建設には制約はあるが、安全第一で考えていきたい。いただいた御意見を総合して教育委員会で一定の方向性を早期に出していく。

（２）生涯にわたり学び続ける教育の充実

＜論点１：確かな学力の向上＞

・ＩＣＴ機器を使った教育や環境整備は進められているが、諸外国と比べると日本は遅れていている。行政の立場からの教育産業の育成や、デジタル機器やソフトを提供している企業とのタイアップによる工夫を考えてみてはどうか。

・ＡＩやＩＣＴ機器の普及によって授業プログラムが確立していく時代では、教師の役割をどのようにするかをしっかりと構想していかなければならない。

・ＩＣＴ機器を家庭学習で活用する際、学校の授業と連結させて、個々の学力レベルに応じた効率的な学習が期待できる。保護者としては、効率化によって生じた時間を留学生の受入や交流など、子供たちの体験活動に有効利用できる。

・単なる教科としての英語を教えるのではなく、英語を使ってスポーツや音楽など実技科目を教えることで、学校の中で生きた英語に触れる機会をつくることができ、更に学びが深まるのではないか。

・外国語を習得するためには、日本語の語彙を増やすことと論理的思考力を身に付けることが大切である。そのためには、小・中学校における日本語教育を充実させていく必要がある。

＜論点２：ライフステージに対応した教育の充実＞

・年齢に関係なく、学習意欲がある人に対して、いつでも学べる場が用意されている社会が必要である。静岡県は一度社会に出た人がいつでも勉強できる場がきちんと用意されている県になると良い。

・様々な県の取組について、もっと県民に周知する方策を考えるべきである。また、外国人が年齢・性別・国籍に関わらず、参画できる具体的な仕組みを設けて欲しい。

・子供たちの放課後の過ごし方について、地域の大人と何かを作り上げるような地域活動への参加もしっかりと評価してあげられるシステムがあると子供自身の活動に多様性が生まれ、学力向上に繋がっていくのではないか。

・学校内ですべての活動を実施しようとするのではなく、地域や企業と連携していく体制になると良い。スポーツ分野では、学校と協力したいと思っている人達がいるので、話し合う場があれば良いのではないか。

・社会人の学び直しだけではなく、優れた能力を持つ子供たちを更に伸ばしていく場として最も受け入れやすい教育機関は大学である。大学コンソーシアムで全ての世代、全ての国籍の人にとって開かれている機関に変えていく必要がある。

６　知事総括

○いただいた御意見を踏まえ、「才徳兼備」を基本理念として、徳を失わないようにしながら才を高めていく静岡流の人材育成を社会総がかり、地域ぐるみで進めていく。

第１回協議事項に関する実践委員会からの報告

協議事項「国内外で活躍できる人材の育成」
論点２：県立高校における魅力ある教育環境の充実

＜伊東地区新構想高校への改編に関する意見＞

○統合により商業高校で実施されている実践的な教育内容を普通科高校に上手く取り込むことで、**産業界との繋がりによる深い学びが実現でき、将来に可能性のある新しい学校になっていく**のではないか。（杉委員、竹原委員）

○自然環境や資源を活かした他県にない**静岡県独自の教育を推進する新しい学校をつくるという視点で考えていくと良い**のではないか。（マリ委員、渡邉委員）

○高等学校に特別支援学校を併置する共生・共育は大変意義深い。ただし、成功するケースとそうではないケースがある。**城ヶ崎分校と伊豆高原分校の場合では、それぞれの特色を考慮し、多様性を生かすという観点で、当面存続させるべき**である。（矢野委員長、杉委員）

○分校のように学校規模が小さくても、**学校の特徴や多様性を活かすことを考え、その学校がもつ良い芽を潰さないような配慮が必要**ではないか。（矢野委員長）

○分校生として、何か残してやろう、何かつくってやろうといった反骨精神を消したくない。**学校規模の問題ではなく、分校であるからこそ生まれる生徒たちの気概は大事にするべき**ではないか。（池上副委員長、片野委員）

○伊豆高原分校の生徒にはゆとりある敷地を利用し、地域に開かれた学校で**農業を通じて地域との繋がりを持って**学んでほしい。（片野委員）

○伊東城ヶ崎分校の芸術分野での実績を考慮すると、**すぐに新構想学校として統合するのではなく、時機を見ながら一緒にしていくことが良い**のではないか。（杉委員）

○伊東高校と伊東商業高校に**それぞれ建設する際のメリットとデメリットがあるため、建物の工夫をして**進めてもらいたい。（杉委員）

協議事項 生涯にわたり学び続ける教育の充実に関する論点

技術革新やグローバル化の更なる進展等により、様々な変化が予想される中、誰もが生き生きと活躍し、豊かで安心して暮らせる社会を実現するためには、生涯にわたり主体的に学び続けられる環境の整備が必要である。

そのためには、小学校から高等学校にかけては、基礎的・基本的な知識・技能と思考力・判断力・表現力等を身に付けさせるとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うことにより、確かな学力の向上を図ることが重要である。

さらに、一人一人が様々な社会変化を乗り越えながら、生涯にわたって学び続ける意欲を保ち、ライフステージに応じた学びの機会を確保できる環境づくりが重要である。

これらの取組により、生涯を通じて「才徳兼備」の人材を育む教育を推進していく必要がある。

論点１：確かな学力の向上

確かな学力の向上に向けて、新しい時代に必要となる資質・能力を育成し、きめ細かな教育を進めるためには、具体的にどのような取組が考えられるか。

【検討の視点】

・知識の理解の質を高める読解力、論理的思考力等の育成
・英語教科化に対応した外国語教育の充実
・全国学力・学習状況調査の効果的な活用
・優れた能力を更に伸ばすことのできる教育の充実

論点２：ライフステージに対応した教育の充実

それぞれのライフステージにおいて、誰もが必要な知識・技能を身に付け、自らの可能性を最大限に伸ばすことのできる教育を実現するために、具体的にどのような取組が考えられるか。

【検討の視点】

・社会人の実践的な職業教育や学び直しへの対応
・社会人を対象にした学習機会の充実
・高等教育機関（大学等）と初等・中等教育（小学校～高等学校）との連携の在り方

生涯にわたり学び続ける教育の充実に関する実践委員会の意見の総括

＜論点１：確かな学力の向上＞

・授業でＩＴを活用し、個人やチームで課題を見つけて解決していくような学習を進めていくと、実社会で役立つ能力を養える。また、子供の自発性を伸ばす教育は、子供にとって学びが楽しくなるのではないか。

・論理的思考力を高めるためには、子供たちが国語を学ぶ目的と、学ぶことによって何の役に立つのかが見えてくることが大切ではないか。

・学校の中に異文化を身近に感じさせるきっかけや工夫があると、子供たちの世界が広がり人生が楽しくなることを感じてもらえるのではないか。

・学生時代から実社会で活かせる能力を育むために、学校だけではなく、企業が学生に対してもっといろいろな経験やチャンスを与えて、彼らに自信を付けさせていくことが大切ではないか。

・13～18 歳くらいの才能をどのように伸ばしていくのかを見られる指導者が必要である。

＜論点２：ライフステージに対応した教育の充実＞

・社会人が大学や大学院に進学する際、職場から学びへの橋渡しができる専門的な塾や講習の開設などのバックアップがあれば良い。また、社会人入学や大学院入学など非常に高いハードルしかないので、社会人が受けられるような専門講座を県でバックアップしていくような体制ができないか。

・県内の大学でインターネット等の講義により修得した単位を認めて、卒業や学位を取得できる仕組みがあると良いのではないか。

・育児と学びの両立を実現できるよう、高校や大学といった高等教育機関における託児所の設置を充実させると良いのではないか。

・小学校や中学校でプロジェクト・ベースド・ラーニング（課題解決型学習）を進めていく中で、大学教員や大学生が子供たちの気付きにヒントを与え、学びをサポートするような関わりが持てる仕組みにしていくと、子供たちの学力はもっと伸びていくのではないか。

実践委員会での意見（詳細）

論点１：確かな学力の向上

新しい時代に必要となる資質・能力の育成に関する意見

○子供たちが主体的に学習に取り組むために、授業でＩＴを活用し、個人やチームで課題を見つけて解決していくような学習を進めていくと、実社会に出たときに必要な企画立案・実践といった能力を養えるのではないか。（渡部委員）

○他県で複数の学校の生徒たちがスマートフォンの使い方についてディスカッションした結果、当事者目線で様々な提案や意見が出された好事例があった。このような子供の自発性と主体性を伸ばす教育を進めていくと、子供たちにとって学びが楽しくなるのではないか。（竹原委員）

○論理的思考力を高めるためには、国語の能力を高めなければならない。国語を学ぶ目的と、学ぶことによって何の役に立つのかが見えてくることが大切ではないか。（宮城委員）

優れた能力を更に伸ばすことができる教育の実現に関する意見

○語学はビジネスのためだけに学ぶのではなく、異文化を知って自分の世界を広げるために学ぶべきなので、学校の中に異文化を身近に感じさせるきっかけや工夫があると、子供たちの世界が広がり人生が楽しくなることを感じてもらえるのではないか。（宮城委員）

○学生時代から実社会で活かせる能力を育むために、学校だけではなく、企業が学生に対してもっといろいろな経験やチャンスを与えて、彼らに自信を付けさせていくことが大切ではないか。（藤田委員）

○子供たちの才能を伸ばすには良い指導者と環境が不可欠であり、13～18 歳くらいの才能をどのように伸ばしていくのかを見られる指導者が必要である。そうした指導者を育成できる研修の仕組みをつくることが大切ではないか。（山本委員）

その他の意見等

○学力を上げるためには、なるべく多くの科目で習熟度別授業を実施し、テストのたびに生徒の入れ替えをしながら授業のレベルを変えていくと成果は出る。（塙委員）

○子供たちのスマートフォンの使い過ぎの問題と、家庭での食の問題を改善しないと、確かな学力を向上させることは難しいのではないか。（塙委員）

論点２：ライフステージに対応した教育の充実

社会人を対象にした学習機会の充実に関する意見

○社会人が大学や大学院へ入学・進学する際、受験勉強が大変なので、職場から学びへの橋渡しができる専門的な塾や講習の開設などのバックアップがあれば良いのではないか。（白井委員）

○単発の公開講座を受けるということではない学びを求める人にとって、現状では社会人入学や大学院入学など非常に高いハードルしかないので、社会人が受けられるような専門講座を県でバックアップしていくような体制ができないか。（池上副委員長）

○日本は資格社会であるので、県内の大学でインターネット等の講義により修得した単位を認めて、卒業や学位を取得できる仕組みを考えてみてはどうか。（マリ委員）

○生涯学習の観点から、育児と学びの両立を実現できるよう、高校や大学といった高等教育機関における託児所の設置を充実させると良いのではないか。（白井委員）

○県の生涯学習情報発信システムに学習の場を提供する側として登録していた。良いツールなので、もっと参加者の興味を引くような周知の仕方や、有効に活用する方策を再度検証してみてはどうか。（豊田委員）

高等教育機関と初等・中等教育との連携の在り方に関する意見

○大学教員が一方的に話すことや、単に施設見学で終わるのではなく、小学校や中学校でプロジェクト・ベースド・ラーニング（課題解決型学習）を進めていく中で、大学教員や大学生が子供たちの気付きにヒントを与え、学びをサポートするような関わりが持てる仕組みにしていくと、子供たちの学力はもっと伸びていくのではないか。（池上副委員長）

その他の意見等

○勉強することも大切だが、豊富な経験を活かすシルバー人材のように、定年後も自分の好きなことや得意なことを活かして、社会に関わっていくことは大切なことである。（山本委員）

○人間は学び続けることが大切であり、自ら学べば、何でもどんなところでも入り込める。学ぶことが増えれば、役に立つことも広がる。それが人生の判断材料にもなるし、よりよい人間関係を構築するのにも非常に重要になる。（山本委員）

資料２

一人一人のニーズに対応した教育の充実に関する論点

一人一人が活躍し、豊かで安心して暮らせる社会を実現するためには、誰もがいつでも新しいことにチャレンジできるとともに、それぞれの夢に向かって挑戦できる環境を整備することが必要である。

多様な人々が社会で生き生きと活躍できるようにするために、特別支援教育においては、障害のある幼児児童生徒の自立と社会参加を目指し、一人一人の教育的ニーズに対応した指導の充実と切れ目ない支援体制の構築を図ることが重要である。

また、外国人労働者受入れ拡大も踏まえ、異なる文化的背景を持つ人々が共に支えあい、共に学びあう教育環境の充実に向けて、増加する外国人児童生徒等に対する支援の充実を図る必要がある。

そして、全ての子供たち一人一人が夢の実現のために挑戦を続け、優れた能力を更に伸ばすことができる教育を推進することが重要である。

論点：誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進

全ての人々が、自らが持つ能力・可能性を最大限に伸ばし、夢や希望を持って社会の担い手となれる教育を推進するために、具体的にどのような取組が考えられるか。

【検討の視点】

・特別支援教育における就学前から就労までの切れ目のない支援、特に増加する発達障害のある子供への支援の充実

・外国人児童生徒等に対する日本語指導をはじめとする幅広い学び、キャリア教育の充実

・子供たち一人一人の夢の実現に対応した教育の提供